# おれたちバーチャルボーイズ！

法螺　吹介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おれたちバーチャルボーイズ！

【Ｎコード】

Ｎ８１２９Ｙ

【作者名】

法螺　吹介

【あらすじ】

『赤い光を見てから記憶がない』と証言する通り魔事件容疑者のニュースを見たジツオ少年は、その日が始業式で六年生になったばかり。

放課後ゲームセンターから意気揚々と帰宅すると、見知らぬ叔父さんチュウタ氏がお客さんとして来ていた。ジツオはチュウタ氏の誘いが断れず、彼持参のテレビゲームをすることに。しかしその常軌を逸した内容、そのゲーム機を巡る争いによって、ジツオの生活が一変する。ジツオの運命やいかに！

## 赤い光とその謎

○

（……続いてのニュースです。仮想県仮定市で男が刃物を持って暴れるというニュースが入っています。目撃者に拠りますと、男は突然奇声をあげ、鞄に忍ばせていたナイフを持って周囲を威嚇、通行人を切りつけようと暴れましたが、通りがかった無職の男によって取り押さえられ、その後通報によって駆けつけた警官が傷害未遂の疑いで逮捕したとのことです。容疑者は『突然赤い光が見えて、気がついたら取り押さえられていた』と話している模様です。この事件により容疑者を取り押さえた無職の男が、容疑者に切りつけられ軽傷を負っています……）

「赤い光赤い光……馬鹿は高いところが好き、狂人は赤い光が好きってね。それにどうよ？　せっかく取り押さえて怪我までして、無職無職ってそりゃないよ。そりゃ無職なんだろうけどね、そっとしといてやろうよ」

「ジツオ！　なにテレビと話してるの、あなた学校行かないとだめな時間じゃない？　そんなだとあなたが無職になるわよ」とジツオの母はシステムキッチンの向こう側から言った。

「大丈夫、こちとら伊達に六年まで登りつめたわけじゃないよ。登校にかかる時間も心得てる」と日源実男（ヒゲンジツオ）ことジツオは言った。

ジツオの母はジツオのトーストが一枚まるまる残っているのを見て「まだ食べてないの？　早く食べなさい」と言った。

ジツオはなにも理由もなくトーストを食べ残しているわけじゃない。トーストをくわえて角を曲がれば、美人でおてんばな転校生とぶつかる確率があがると思ったからだ。もちろん本心から信じているわけではないが、始業式の今日は絶好のチャンス。ジツオはなにごとも試してみなければ気がすまないタイプなのだ。

しかしジツオは空気も読む。ランドセルを拾い上げ、「じゃ、行

ってきます」と言ってからトーストをくわえ、学校へ向かった。

始業式前のホームルームが終わってから「ジツオ、おひさ。学校来るときパン食べてたでしょ？」ときいたのはジツオの同級生、吉田良子（ヨシダヨシコ）で彼女のあだ名はイーコだった。

「食べてたよ、それがどうかしたかい？」

「なんで？」

「理由なんかない、そんなこと忘れてくれ」

「転校生とぶつかりたかったんでしょ？」

「……へー、おもしろいね。それいただいた。転校生とぶつかりたかった、柵の向こう側の女子と知り合いたかったんだ」

「はあ？　意味わかんない、変なやつ」と言ってイーコはジツオに軽蔑した眼差しを向けたあと、「ミキちゃんそれでさー」と甲高い声を出してミキちゃんのもとへ戻っていった。

ジツオはたった一人の友達といって過言ではない相原秀太（アイハラシュウタ）ことシュタイン――五年のとき学級委員長をしていて秀太委員長、それにアインシュタインをもじってついたあだ名――のところにいった。

「シュタイン、ひさしぶ。なんか変わったことあった？」

「おお、ジツオ。なんもないよ。いつもと同じ。塾ばっかだね」

「大変だねー、中学受験だっけ？　ご苦労なこって」

「おまえは受けないの？」

「おれは受ける気ないね」

「受けとけばあとはエスカレーター式で楽できるのに」

「人生山あり谷あり、楽することばかり考えていてはいかんのだよ」

「そりゃそうだよ。だからさ、いま頑張るかあとで頑張るかって話だろ。それにさ、たぶん人生ってずっと頑張りっぱなしだぜ、できるやつはな」とシュタインは瞳をぎらつかせながら言った。

「うん、そうだね。シュタイン、きみは正しいよ。でさ、今日学校終わったら遊びにいかない？」

「おう、いいよ。なにすんの？」

「とりあえずゲーセンにでもいこうぜ」

ＵＦＯキャッチャー、プリクラ、テレビゲーム、エアホッケー、パンチングマシーン、パチンコ、スロットなど。

いろいろな人がゲームで遊んでいる。お年寄り、おじさん、おばさんも。「子どもにはゲームするなって言うくせに自分たちはするんだな、これ。そもそもゲームって子どものものなんじゃないの？」とジツオは言った。

「大人も大して変わんないってことだね」

ジツオとシュタインは日が暮れるまでゲームセンターで遊んで、家に帰った。

「ただいま」と言ってジツオが帰宅すると、玄関に見慣れない靴がある。誰が来ているのか知らないけどなるべく関わりたくないな、でも挨拶ぐらいはしないとあとで父か母、もしくは両方に文句を言われるかもと思ったので、ランドセルを部屋に放り投げてリビングに向かった。

ソファにジツオの父と母、細いジツオの父みたいな人が座っていた。ジツオは「どうも」と細いほうに会釈した。その人は「ジツオくん、おかえり」と言った。彼の足元に大きな飴色のトランクがあるのにジツオは気づいた。

ジツオの父は「おまえの叔父さんだよ。懐古忠太（カイコチュウタ）、チュウタおじさんだ」と説明した。

「おまえ遊んでもらったことがあるんだぞ。憶えてるか？　おまえはまだおしめをしていたがな、はっはっは……」

ジツオの母は「まあ、あなたいやだ、おほほほ」と言った。

「はは、兄さんはいつもおもしろいこと言うね」

頃合をみて「どうも、遊んでもらったようで、ありがとうございます」とジツオが真顔で言うと、笑っていたみんなが静まり返った。

「父親譲りだ」とチュウタ氏が言うと、ジツオの父と母はなにがそ

んなにおもしろかったのかわからないが、大笑いした。

「ジツオくん、ゲームでもしない？」とチュウタ氏はジツオを誘った。

「叔父さん、なんのゲームをするんですか？」

「テレビゲームだよ」

大人になってもまだテレビゲームか、おっさんとテレビゲームなんてしたくないけどつきやってやるか、とジツオは思って「一応新しいやつ揃ってると思います」と言った。

「持ってきたのがあるから、それで遊ぼう」と言ってチュウタ氏は飴色のトランクを二度叩いた。指に絆創膏が巻いてあるのに気づいた。重症だな、とジツオは思った。

ジツオは自分の部屋にチュウタ氏を案内し、部屋に入るとなぜだかいつもと違うような心地がした。ドアがゆっくりと閉まる音を聞くと、いつもより静かな気がするなと思った。

直後によくわからない力によって世界が波打ち、ぐるぐると回転、目に見えていたものがきれいさっぱり消え去り、どこまでも続く真っ白な空間にジツオとチュウタ氏は取り残された。

ジツオが驚いて言葉を失っていると、チュウタ氏が「大丈夫。元の世界には絶対に戻れるから」と声をかけた。

「落ち着いて。……さあ、ゲームを始めよう」

## 一

チュウタ氏は飴色のトランクを地面に置き、開いた。なかには赤い双眼鏡と三脚、ゲームのコントローラーが二組あるようで、チュウタ氏はそれを組み上げ始めた。

ジツオは自分はなにかの間違いで死んでしまったのかと思ったが、これはどちらかといえば、死んでいるというより夢を見ているとい

うほうが近い気がする、というより、夢のほうがいいな、と思った。仮に死んでいるとしても、この世界が続いていくとしたら、この世界なりに生きていかないと。ああ！　でもこんな真っ白な世界は退屈で死にそうだ！　一度死んだ人間が二度死ぬことなど……。

「ジツオくん、聞いてるかい？」

「え？」

「聞いてくれ。なにから話せばいいか、どう説明したらわかってもらえるか自信はないけど、ぼくは真実のみを話す」

　よりによってよく知らない叔父さんだけはいるんだよな、とジツオは思った。最悪。

「アズ・ユー・ライク」とジツオはつぶやいた。

「ジツオくん！」

　チュウタ氏はジツオを引っぱたこうと手を振り上げたが、ジツオが身を仰け反らせて「はいはい、わかりましたよわかりました」と言ったので振り上げた手を下ろした。

「聞かせてくださいよ。ちょっとはおもしろい話してくださいよ」

「ぼくには落語家になった友達がいる」とチュウタ氏は言った。

「……『赤い光を見た』といって暴れる人たちのことは知っているかい？　まあ知らないとしてもそういう人たちがいるんだ。だいたい十年ほど前からそう供述する人たちが現れた。彼らには『赤い光』以外にも共通点がある。だいたいが男性だということ、歳は三十前後であること。そして、あるものを所有していること。そいつがなにだかわかるかい？」

　そう言ってチュウタ氏は組み上げた二組の双眼鏡らしきもののほうへ目線を向けた。ジツオもそれを見たが、なにかわからなかったので「いえ」と答えた。

「そいつはバーチャ……おっと、名前を出すのもはばかれる。とにかく、そいつは業界最大手の会社が製作したというのに一年持たなかったものなんだ。二十年ほど昔の話さ。どうしようもないクソゲーで会社の黒歴史、輝かしい業績を残している会社の汚点――知っ

ている人はみんなそう思っていると考えていい。でもそれは、あくまで表向きの話なんだ。実は、そいつはいわくつきだったのさ」
チュウタ氏は自らの話に満足して、二度うなずいた。
ジツオは叔父さんは心の病気なんだな、と思った。
チュウタ氏は身振り手振りを交えて話を続けた。
「そのゲームの開発の基になったのが、ある大国が開発した軍事演習訓練機だ。その訓練機は、スコープを覗き込むとまるでその場にいると錯覚するほどの３Ｄ映像が赤い光で表現されるというものだった。軍隊に必要なのは勇敢な兵士だ。赤い光の仮想空間――そこで訓練させれば、死の恐れさえ克服した兵士を増産できる、と軍の上層部は考えた。ところがそうはならなかった。その訓練機は死をも恐れない兵士を増産するどころか、使用した兵士のほとんどを骨抜きにした。一度使用すると寝食を忘れてゲーム――おっと訓練――に没頭するようになったからだ。間違いに気づいた上層部はすぐにその訓練機を禁止したが時すでに遅し。もう体制を維持できるだけの兵士は残っていなかった。体制の崩壊、そして情報の流出ってわけさ」
「へえ、興味深い話ですね」とジツオは優しさから言った。
「まだ続きがある」とチュウタ氏が言ったので、ジツオは嫌な気持ちになった。
「崩壊直前の情報資料に『訓練機に没頭した兵士に異変が現れた』というものがあったんだ。……繋がってこないかい？」
「赤い光を見たという犯罪者ですか？」ジツオは自分の叔父さんが取り憑かれている妄想の内容が理解できてきたと思って、少し安心した。
「そう。一連の犯人はおそらく中毒症状が進行して、精神に異常をきたしていると考えられる」
「でもそれだとニンテ……」
「よせ！　死にたいのか！　その名前は使うな！」とチュウタ氏はすごい剣幕で怒鳴った。

ジッオは妄想にどっぷりつかりきった叔父さんを見て、やっぱり安心できないなと思った。
「ああ、すみません。では例の組織はどうやってその情報を？」
「当時世界中のほとんどのシェアを持っていたからね。金なら払えたはずさ。いざとなれば髭の土管工、という手もある」
「なるほど」

## ゲームの起動

二

ジツオは気づいた。この荒唐無稽さはまるで夢のようではないか！　本当に夢なのだ。夢を見ている最中にこれは夢だと認識するのは難しいという。いま初めて夢の認識ができた。とにかく夢ならば、いずれ覚める。叔父さんの茶番に付き合って退屈しのぎをしてればいい、とジツオは結論づけた。

「なぜ叔父さんはそこまで知ってるんですか？」

「それは言えない。時期が来たら話す。でもいま話したことは真実なんだ、落語家になった友達に誓う。これでどうだい？」

「信じます」

「ありがとう。とにかく、ぼくは考えたんだ。ここまでわかっていて、行動に移せるのはぼくだけだ。正義を貫くべきだ。訓練機をこの世から一つ残らず消しさらなければならない、とね」

「え、行動って？　社会に訓練機という麻薬が蔓延していて、それを一掃したいというのはわかります。しかし重要なのは訓練機を供給する組織を見つけ出すことでは？」

「われわれは訓練機をプレイすることにより黒幕に近づいていく」

「それで黒幕に近づけると？」

「論より証拠、実際にしてみればわかる」

「でもそれだとぼくらも中毒になってしまうのでは？」

「それは大丈夫。ぼくらのゲームは毒抜きをしているからね。安心は保証する」

それを聞いたジツオは、毒抜きって……あっ、まあ夢だからどうでもいいんだ、と思った。

「どんな内容のゲ……訓練をするんですか？」

「もういいよ、もうゲームで構わないよ、実際ゲームだし。それで訓練内容は毎回変わるが、今回は飛行訓練シミュレーションだ。コ

ックピット視点のシューティングと考えていい」
「操作は一般的なゲームとほとんど同じと思っていいんですか？
左手の十字キーで動かして右手のAとBボタンが攻撃とか」
「ボタンは飾りだ。コントローラーを握って、ただ念じればいい」
「それってすごくないですか？」
「訓練機はすごいんだ。訓練機の秘密はまだある。いまのきみには必要ないし、混乱させるだけだと思うから時期が来るまで話せないけど……。とにかくゲームを始めよう」
　ジツオとチュウタ氏はそれぞれ訓練機の前に座った。しかし訓練機の構造的に使いやすいポジションというのが難しい。寝ても座ってもどんな体勢でもスコープを安定して覗き込むことはできない。
「スイッチを入れれば解決さ」
　ジツオは訓練機を手に持って、動きそうなとっかかりを適当に動かしてみたが反応がない。そもそも電源がないのに点くわけない。
「うっひょー、とかあわわわ……って全力で奇声をあげてテンションを高めたあと、レッツ・ゴー・クレイジーといい発音で叫ぶとゲームのスイッチが入るんだ」
「本気ですか？」
「習うより慣れろってね。見本を見せるよ。あわわ、うほほ、あいへーとうぉー、うぉー、うぉー！　レッゴークレイゼー！」とチュウタ氏はあわわ部分で手を口に当てたり離したりし、うほほで胸を両手で交互に叩き、戦争を憎んでから屈んで身を縮めたあと、レッゴー……のゴーの部分で飛び上がるという振りつきで叫んだ。
　すると訓練機は変形を始め、膨張、チュウタ氏を飲み込み、大きくて赤い卵型の箱になった。
（捨てるんだ……いろんなものを捨てるんだ……）とチュウタ氏はジツオにテレパシーで伝えた。
　ジツオは夢とはいえ恥ずかしいなと思ったが、「はあああ！」と唸ってテンションを高め、「レッツ・ゴー・クレイジー！」と叫んだ。すると膨張しはじめた訓練機に包まれ、気づくと赤い光で溢れ

るコックピット内の操縦席に座っていた。適度な堅さのいい感じの座り心地だとジツオは思った。
（いい発音ではなかったが、伝わるものがあった。大事なのは気持ちだよ）と機内のスピーカーか何かからチュウタ氏の声が聞こえた。
ジツオはコックピット内を見回したが、目の前にコントローラーと台、壁の計器類はボタン二つ以外ダミーで赤く発光しているだけ、という具合だった。
壁にあるふたつのボタンのうち、右のボタンを押すとスコープが現れ、ジツオの顔にちょうどいいポジション、圧力で引っ付いてきた。剥がそうとしても無理だったので動揺したが、手探りでボタンをもう一度押すと、スコープが顔から離れた。
次に左のボタンを押すと（レッツ・ゴー・クレイジー！）と高いテンションで叫ぶジツオ自身の声が聞こえた。
（心が弱ったとき、それを聞いて自分を鼓舞するんだ。きみもそのボタンを連打することになるだろう）
「ゲームはどうすれば始まるんですか？」とジツオと言ってみた。
（コントローラーを握り、スコープあてがいボタンを押す。そしてゲームがしたいです、と念じるんだ。そうすれば始まる）
ジツオはその通りにやってみた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8129y/

---

おれたちバーチャルボーイズ！

2011年11月28日08時55分発行